

【報告】

外国にルーツのある大学生との意見交換会 ～今からわたしたちにできることは何か？～

(調査研究委員会委員、茨城支部会員 牧島悠美子)

2022年1月23日(日)14:00～15:30 調査・研究委員会主催の2021年度第4回オンライン勉強会に参加した。今回は外国にルーツのある大学生お二人から話を聞き、その後に意見交換(懇談会)をするという内容で実施され、参加者は25名であった。以下、その概要について報告したい。

1. ロハス ロペス アンヘラ パトリシアさん(以下アンヘラさん) 南米コロンビア生まれ 静岡文化芸術大学 文化政策学部国際文化学科 3年

6歳で来日し、小学校から高校時代までを静岡県富士市で過ごした。富士市には国際交流協会があり、そこでよい先生に出会って日本語を習った。16歳の時、高校の国際科に進学し、2年生の時にオーストラリアへ研修に行った。

アイデンティティを問い始めて悩んでいた時、ブラジル人の友人が紹介してくれたのが現在通っている静岡文化芸術大学。英語が好きだったのでチャンスと思い、英語小論文と面接による推薦入試を受験して、19歳の時に入学した。

大学生になって、浜松で初めての一人暮らしを始めた。浜松は多文化共生で有名な市であり、日系ブラジル人、ベトナム人、インド人などが多い。街で見かける看板も多彩で、富士市とは全然違うと感じた。大学にも外国にルーツを持つ学生が多い。

現在は20歳。多文化共生のグループを立ち上げ、慶應義塾大学の学生との交流会を行っている。在日韓国人、日系ブラジル人、フィリピン系など多様な人々との交流が可能である。浜松の国際文化協会やインターネットラジオなどで情報発信をしている。「若者へ伝えたいメッセージ」として中学生へのメッセージを発信するなど、楽しく充実した大学生活を送っている。

2. グェントゥナさん(以下グェンさん) ベトナム生まれ

日本福祉大学 国際福祉開発学部 国際福祉開発学科 2年

2012年11月25日に来日した。来日前は祖父母に育てられており、来日時は小学5年生の三学期だった。現在は大学2年生で、5人家族。両親と高校2年生の妹と中学2年生の弟(日本生まれ)がいる。

ベトナムは9月入学であり、小学校は5年制、中学校は4年制で学習の内容や学校のシステムが日本とは違っている。日本の小学6年生はベトナムでは中学1年生に相当する。日本と比べ数か月早めに勉強が進んでおり、ベトナムでは中学受験も経験していた。急に日本に呼ばれたので、心の準備も日本語の準備もせずに来日し、愛知県西尾市の小学校に入った。小学6年生の1年間で小学1年から6年までの漢字を覚えた。小学生の時の支えになったのは家族であり、家の中では日本語のみ使用するようにルールを決めてくれた。

地元の中学校に入学したが、教科の勉強が必要になった。日本語も勉強しないとイケなく

て大変だった。母は日本語が分からず、父は帰宅が遅かったので勉強を見てもらえなかった。両親は共働きで、家事の手伝いをし、妹や弟の面倒もみた。先生たちの手助けや支えがとても助かった。両親には日本の学校の仕組みがわからず、先生に相談した。多くのスピーチコンテストなどの大会にも参加した。

頑張って内申点をあげ、進学を希望した。父親は就職して定時制高校に進学することを希望したが、大学進学への進学の夢をあきらめず普通科に進学した。国語と歴史が苦手だったので、理系を選択したが、まわりはほとんど男子になり、学習意欲がなくなることもあった。元々好きだったデザイン方面に進むことを考えたが、学力のことがあって今の大学に進学した。高校時代がいちばん日本人らしく生きていた。

大学に入ると国籍という壁を知り、日本人に生まれていたらよかったと思う時期があった。大学入学は決まったが、コロナで入学式は中止となり、授業はオンラインのため、友人ができない状況で1年生の時は辛かった。大学2年生になって対面式の授業が始まり、今は外国にルーツを持つ子供たちへのボランティア活動をしている。また、Zoomを通じてベトナムにある日本語訓練校で日本語を教えたりもしている。

3. 質疑応答

上に紹介したように、お二人のライフヒストリーや現在の活動のお話を伺った後、参加申込時に寄せられていた質問を提示し、お答えいただいた。（回答者の敬称は略）

Q：日本で生活し、学業をしていくのに苦労することはどんなことか。

アンヘラ：6歳で来日して小学校に入った時は他の人と同じレベルでできたので、そこまで苦労しなかった。苦労したことといえば、両親は日本語が得意ではないので、宿題でわからないところを誰にも聞けないことだった。

グエン：途中から来たので、勉強量を補う必要があった。中学校は小学校より教科も増え、多くのことを学ばないといけない。家庭や周囲の環境により、勉強する時間がない子もいる。3か月後に来日した友達の一人のベトナム人は、最初の頃は会話ができなくていじめのようなことがあり、学校に来なくなった。先生の依頼で学校に来るようにサポートした。その人は1年後に定時制高校に進学した。自分の場合は、勉強は母親がサポートしてくれて順調に大学まで行けた。

Q：卒業後も日本に住みたいと思うか。

アンヘラ：考えるところだが、なんだかんだ言っても日本に住み続けると思う。海外に行くことに興味はあるが、白米が恋しくなると思うので日本に住み続けたい。

グエン：外国にルーツを持つ若者がベトナムに戻ってもうまくやっていけないと思う。日本の生活に慣れてしまった。学習支援に関わることをしたい。

高校時代、理系クラスでは一緒に頑張れる友人がいなかった。一般受験で受験するように言われたが、母国語が使えないので一般受験は外国にルーツを持つ学生には不利であり、今の大学に進学することになった。受験方法を教えてほしかったが、大学進学する外国人生徒が少なく、先輩もいなかった。

Q：日本語修得支援で、国や地方自治体、ボランティアを含めたNGOなどに最もしてほし

いことは何か。

アンヘラ：日本語を教えることは大切。言語を知っていることで人権を守れるし、自分の主張ができる。将来、日本で暮らす時にそれが可能になる。その一方で違う視点から見ると、日本語を修得すると、日本人化してしまうことが問題でもある。外国にルーツを持つ子どもに寄り添う形で支援することが大事。上からの支援ではなく、伴走者としての支援が大切である。

Q：日本の大学、小・中・高校全般にわたる教育環境の良い所と悪い所について、ご自分の経験からどんな意見を持っているか。

アンヘラ：日本には全体主義があり、それが苦しかった。他の人と違う自分がいる。全体主義で合わせないといけないので、そこに収まらない人たちが苦しくなる。

当日寄せられた質問にも答えていただいた。以下、そのいくつかを紹介したい。

Q：お二人は方言を話していないが、方言はわかるか。

アンヘラ：富士市の方言が出る。

グエン：大学の友達に方言をしゃべっているとと言われることがあるが、自分では気づいていない。

Q：日本に同化するのではなく、母国の文化も大切にすることが重要だと思っている。母国語を使う機会はあるのか。また、日本にいても大切にしている母国の風習や考え方にはどんなことがあるか。

グエン：妹たちはベトナム語ができないので、今は家ではベトナム語しかしゃべらないようにしている。週末はベトナム料理を作ってくれる。地域でもベトナムのことを知ってほしい。

アンヘラ：家庭ではスペイン語しか使わないルールにしている。両親はコロンビア人であり、食文化も大事にしている。コロンビア映画の話も聞かれることがある。行政は多文化共生を進めているが、市民は「郷に入れば郷に従え」というところがある。どうすればよいかわかってしまう。明確な答えはなくグレーゾーンである。

Q：進学の時、国籍で悩んだとのことだが具体的にどんなことか。

グエン：公務員になりたいと思ったから。今はなれるところがあり、チャンスが増えた。

Q：地元の国際交流協会などから、アプローチはあったのか。

アンヘラ：相手からのアプローチはなく、自分の方から行っている。

グエン：相手からのアプローチはない。基本は自分から行っているが、最近はずみの活動を通して参加したことがある。

最後に、アンヘラさんからは「知ることは最初の一步。外国にルーツを持つ若者について知ってほしい」と要望が述べられた。また、参加者の中からは「2つの文化のはざまに生きていることは素晴らしい特権である」というエールが送られて会を終了した。